日中両言語における漢字語彙の比較
「筆」とその派生語を中心に[1]

曹　　瀾

1．はじめに

日本と中国、両国は古代から二千年あまりの交流の歴史がある。今から二千年前の西暦57年、倭の奴国が光武帝に使節を送って、漢委奴国王印が賜われて以来、日中両国の交流が始まった。漢字が日本に伝来し、漢字が日本語に多く吸収された。明治維新をきっかけに、遂に逆の状況になった。特に日清戦争後、国父と呼ばれる孫文[2]を始め、中国の近代化のために努力した政治家、革命家が日本に亡命したり、数多くの中国人は中国を立ち上がらせるために日本に留学した。彼らによって、大量の和製漢語を中国に導入し、交流を続けていた。日中戦争という「不幸な歴史」を経て、1972年日中両国が国交正常化以来、両国の首脳たちは「過去を顧みて、未来を切り開こう」という趣旨の発言があったり、一時切断した交流が再開された。近年、経済貿易と文化交流が活発になってきたが、日中関係は良くなったとは言えない。このような歴史の流れの下、日中文化の中で最も重要な絆である漢字の交流、そして、両国の漢字語彙の意味においてどのような変遷があったのか。この問題について、筆者の修士論文は全般的に整理したが、細部までの研究が足りないところもあった。本論文では、日中両言語の中の「筆」という最も歴史が長い漢字の中の一つを取り上げ、「筆」という字と本来「筆」という書写道具の歴史をまとめた。そして、近代に入って発明された筆というものに近い類似品の名前、日中両国の諺、熟語など、日本語と中国語における「筆」とその派生語の分類と比較を試みた。

2.「筆」の歴史について

２－１ 「筆」の発明者ついて

「筆」という漢字の由来と本来「筆」が指している書写道具の歴史を簡単に整理してみたい。筆の発明者について、中国の民間伝説では、いくつのバージョンがあり、詳細は少し差異があるが、大体次のような物語が語られている。紀元前223年頃、秦国の将軍蒙恬[3]は秦王の命令で天下統一するために大軍を率い、楚討伐へ出陣した。当時人々は細い竹を使い、先を糸にして簡牘[4]に文書を書いていた。蒙恬は頻繁に戦地から戦報を書いて秦王に送るうちに、この書写道具は非常に不便だと思っていた。ある日、蒙恬が狩猟したとき、怪我した動物が逃げる途中、尻尾が血痕を残したことを見た。そして、蒙恬は様々な動物の毛系を試して筆を作り、さらに改良を行い、現在の筆の形と近い道具を作った。そして、筆の作り方を現地の人々に教え、筆の作り方が広がったと言われている。現在、「湖筆」の産地である浙江省湖州善璉鎮には「蒙公祠」というお寺が建てされ、いまでも蒙恬を製筆の祖師として祀っており、様々な祭りも行われている。

民間伝説のほか、中国の書物にもこのような記載がある。『大平御覽』[5]の文部二十一巻の「筆」の項目では、『博物誌』[6] 曰：「蒙恬造筆。」と収録された。

民間伝説と少数の文献では初めて筆を作った人が秦の蒙恬だと見られるが、先秦時代（秦の時代より前の時代）、筆また筆のような道具が既に存在していたと考えられる。まず、先秦時代から、特に戦国時代の各国の思想家が大量の古典をいままで残してきた。その中、「筆」という言葉を使った文もある。

『荘子・外篇・田子方』：「舐筆和墨」（筆を舐め、墨を磨る）
『国語・魯語』：「臣以死奮筆，奚啻其聞之也。」（臣が死の覚悟を持ち、直接に上書）
『戦国策・齊策六』：「建曰：『請書之。』君王后曰：『善。』取筆牘受言。（建：「書きなさい」 君王后：「よい」 筆

と簡牘を取り、聞き取りする。）
『禮記・曲禮上』:「史載筆，士載言。」（史官が筆を持ち、
士官が進言を持っている）

後漢（25年～220年）の許慎[7]が編修した『説文解字』[8]には中国の戦国時代一部の国において使用されていた「筆」を意味する文字「聿」を収録し、「聿」の解釈には「書写道具であり、楚国では『聿』と謂われ、呉国では『不律』と謂われ、燕国では『弗』と謂われる。」[9]と書いてあった。戦国時代の各国が「筆」を意味する文字がすでに存在していたので、「筆」のような道具もすでに存在していたと考えられるであろう。

考古学と発掘調査から先秦時代には、筆のような道具がすでに使われていた証拠がある。1955年中国の陝西省西安半坡遺跡から出土した、今から約4000年前の仰韶文化[10]時代の陶磁器の中、最も有名な「人面魚紋彩陶盆」と命名された陶磁器に描かれた模様が筆また筆のような道具で描いたものであることが推測されている[11]。甲骨文字研究者である董作賓[12]が出土した殷の時代の甲骨文字が刻まれた骨の上に、まだ刻んでいない、甲骨文字を刻むための朱また墨で筆のような道具による下書きの痕跡を検出した。董氏は一部の甲骨文字が甲骨の表面に筆で書いた後に刻したと考えている[13]。更に、1957年、河南省信陽市北20キロ離れているところから、戦国時代の楚国の墓が見つかり、出土した遺物の中、小型の箱に筆の実物があったと報告されている[14]。

以上の証拠から見ると、秦の時代より前、筆のような道具が既に存在していたことが分かる。ただし、先秦時代の古典の文字は全部秦の筆のような道具で書いたものではなく、ほかの道具を使っていたこともあると考えられている。

元の時代の吾丘衍[15]の『学古編』:「上古無筆墨，以竹挺點漆書竹上，竹硬漆膩，書不能行」
（日本語訳：大昔筆と墨がなかった、「竹挺」で「漆」を付けて竹簡に書き、竹が硬く、「漆」がしつこく、うまく書けない）
「竹挺」という書写道具は「竹」を筆として使っていた可能性が高いと

考えられる。そして、『新唐書』には、「木棒」を筆として使っていたと記録されている。つまり、秦の筆より以前、竹、木棒などが秦の筆の元祖として使っていた可能性があるが、秦の蒙恬が従来の筆を大幅に改良し、獣の毛と竹で作られたより精巧な筆ができたのである。それから、筆が普及されたことにより、古代人は蒙恬が筆の発明者だと考えたのだろう。

西晋の時代の崔豹が『古今注』には、「牛亨問：『昔から書契があったゆえ筆もあったはずだが、なぜ世は蒙恬が筆を作ったと伝えているか？』答：『蒙恬から秦筆が作られた。柘木を筆管にし、鹿毛を筆先の中心部にし、羊毛を筆先の外部分にし、要するに、古くからの筆と違い、鹿豪竹筆のことである」[16]

秦が天下統一を遂げたとともに、篆書体（小篆）が公式統一文字になった。それから、隷変[17]が行なわれ、従来の篆書体と比べ、隷書体により初めて筆画と筆勢が生まれ、以前の道具より柔らかい、より精巧な筆で書いたこが推測される。秦の時代頃から、現在のような筆が普及し、普通に使われ始められたと考えられる。蒙恬はゼロから筆を発明したのではないが、当時の筆へ大きな改良を施し、筆の普及に貢献した。それからの秦の筆が中国だけではく、後に東アジア、漢字文化圏に大きな影響を与えたと考えられるであろう。

２－２ 「筆」という漢字の歴史

「筆」という漢字も、秦国が天下統一を遂げた後、文字統一するまで少し変化があった。先に述べたように、戦国時代の各国が書写道具を指している文字が独自に存在しており、簡牘に字を書く道具を「聿」と呼ばれていた。「聿」という字は甲骨文字と金文[18]まで遡ることができ、「筆」の本字であると考えられる。「聿」は象形文字であり、甲骨文字、金文と篆書体の「聿」の文字はいずれでも人の手が筆を握っている様子を描いているのである。上の部分 は手の様子を描き、下の部分 は「筆」本体の様子を描いている。

図１.「聿」の金文、篆書体と筆の持ち方

金文　　篆書体(小篆)　　筆の持ち方

蒙恬が筆を改良し、そして、筆管が竹で作られることが多いので、秦国が天下統一を遂げた後、文字統一を行う時、全国の標準書体とされた篆書体の「聿」の上に「竹」という冠が付け加えられ、「筆」という漢字になった。西暦100年頃成立した中国最古の漢字字典である『説文解字』には「筆」が収録された。

『説文解字』聿部：　筆：秦謂之筆。从聿从竹。
日本語訳:筆:秦から筆と呼ばれ、「聿」と「竹」を持ち、組み立てた。

筆がいつ頃日本に伝来したのかは定説がない。大和時代の初期、応神天皇の朝、百済の王仁が『論語』を持って日本に来たと同時に筆も伝来したのであろうとの説もあり、その後嵯峨天皇の時代（820年頃）に、僧空海（弘法大師）が唐に渡り筆の製法を習得して帰国し、日本での筆造りが始まったと伝えられている[19]。漢字が日本に伝来した後（西暦300年前後)、日本人が中国、朝鮮から来た人と筆談を通して交流したことがある。当然、筆談するとき、筆という書写道具も使われていた。当時中国では秦筆がすでに普及されたので、その時期に漢字と筆が同時に、日本に伝来した可能性が高いと考えられる。さらに、『隋書』「東夷傳倭國傳」には西暦600年日本から遣隋使が中国に来たことが記録されており、筆が日本に伝来した時間は西暦600年以前であると考えられるであろう。

それから、日本と中国で筆が使われ、独自な文化による言葉や諺も生

じた。日本の有名な諺である「弘法筆を選ばず」、中国の成語である「弃笔从戎」（筆を捨て、兵器を取る。）が本義であった。多少の転義した言葉、例えば、「筆頭」も生じたが、「筆」という漢字とその基本的な意味である「筆」という書写道具は千年以上に渡っても、同じであったと考えられる。

日本では、現行の新字体でも「筆」という漢字が使われている。一方、中国が1956年から実施した漢字簡略政策で、「笔」という簡体字が一般的に使われている。筆は竹の下に毛糸をつけていることから、「笔」は「竹」という冠の下に「毛」をつけた「会意文字」である。1716年に完成した『康熙字典』には「笔」は「與筆同」（「筆」と同じ字である）と書かれている。「笔」という漢字は中国の南北朝時代から見られた俗字である。最初は北斉[20]の『隽修罗碑』[21]という石碑から見つかり、宋の時代の『集韻』にも収録されている。

図２．「筆」の各字体の比較

篆書体（小篆）　日本の常用漢字、中国の繁体字（楷書）　中国簡体字（楷書）

3. 日中両国の「筆」の比較

漢字とともに日本に伝来してから1956年まで日中両言語とも同じ漢字「筆」が使われていた。現在日本語に使われている新字体「筆」と現在中国語に一般的に使われている簡体字「笔」の字体が違うが、先に述べたように同じ字である。少なくとも1400年以上に渡って、基本的意味は同じ道具「毛筆」を意味していた。漢字、毛筆という書写道具、そして後漢から発展してきた製紙術、これら三つの不可欠な要素があったことにより、日中両国において、書道という西洋には存在しない素晴らしい芸術ができたのである。しかし、近代に入り、西洋の鉛筆、ペンなどが東

アジアに伝来、普及したり、科学の発展により、新しい筆記用具が発明されたりしたことによって、日中両国においても、毛筆の使用と書道の教育なども危機に直面した。こういう背景の下､日中両言語における「筆」という漢字の意味が拡張することとなり、ここからは「筆」と「筆」を語素として作られた両言語の語彙の比較を試みることにしたい。

まず､両言語の常用辞書における｢筆｣の意味の差異を調べることにする。

日本の『大辞泉』を調べると、次のように

ふで「筆」

一、名詞

１竹や木の柄の先に獣毛をたばねてつけ、これに墨や絵の具などをふくませて字や絵をかく道具。毛筆。また、筆記具の総称。

２書くこと。また、書いたもの。

３文書を書くこと。また、その文章。

二、助数詞。文字や絵を書くとき、筆に墨や絵の具などをつける回数、または筆や鉛筆を紙にあてて動かす回数を数えるのに用いる。

中国語の常用辞書『新華字典』における意味をまとめると、

１、写字、画图的工具：毛笔。钢笔。铅笔。笔架。笔胆。（字や絵をかく道具）

２、组成汉字的点、横、直、撇、捺等：笔画。笔顺。笔形。笔道。（漢字の要素）

３、用笔写, 写作的:笔者。代笔。笔耕。笔谈。笔误。笔译。笔战。笔名。（書くこと）

４、写字、画画、作文的技巧或特色：笔体。笔法。笔力。文笔。工笔。曲笔。伏笔。（字また文章を書くためのテクニック、特色）

５、像笔一样直：笔直。笔挺。笔陡。（筆のように真っ直ぐ）

６、量词，指钱款：一笔钱。（助数詞）

７、指散文。随笔。（散文、随筆）

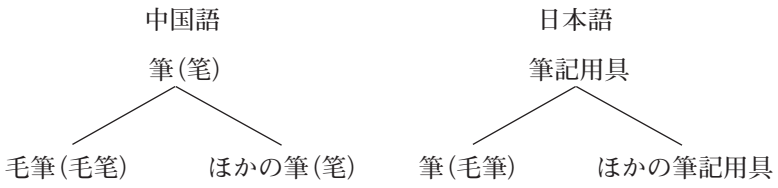
日中両言語とも一番目の意味、すなわち名詞として筆記用具の筆を指している範囲の差異に注目して比較してみたい。日本語の意味に、「筆記

具の総称」と書いてあるが、実際に一部の語彙に限られている。例えば、「筆記用具」、「筆筒」、「筆箱」などである。辞書の解釈からみても、日本語の「筆」は毛筆というものを指している語義を強調している。実際に日常使用からみると、特に訓読の「ふで」で単独に使われるとき、ほぼ「毛筆」を指している。

一方、中国語では、「筆」という漢字が単独に使われるときも、毛筆だけではなく、全ての字や絵をかく道具と指しており、本来の「筆」の意味は「毛筆」という語彙に取って代わられたのである。

以上の差異を簡単な図にまとめると、

図３

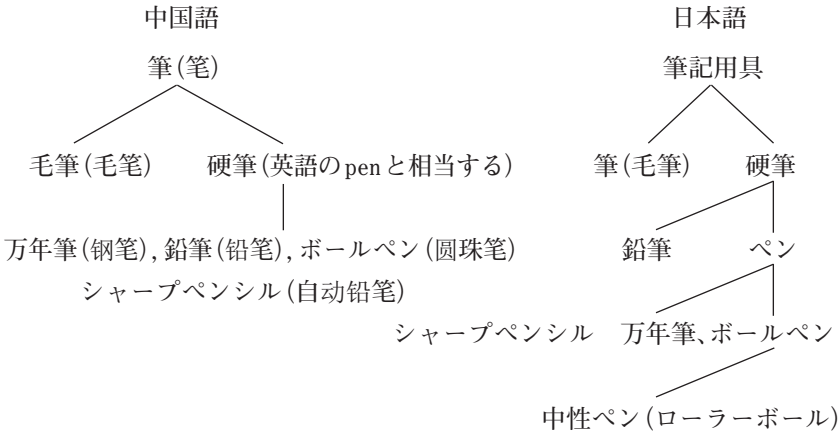


近代に入り、西洋から筆記用具が伝来し、また新しい筆記用具が発明された。「筆」を語素として、外来語を借用、翻訳する場合、あるいは新しい名詞を作り出す場合、日本語は中国語より複雑である。例えば、「鉛筆」と「万年筆」の中の「筆」はより筆記用具の一種だという意味に近いが、他方、「筆ペン」の中の「筆」は「毛筆」のような柔らかの特徴を持つと強調している。「硬筆」は「毛筆」の対義語として使われ、筆記用具の分類のうち、「先が硬い」ものを表している。さらに、日本語がカタカナで表記する外来語を使用し、「ペン」が「硬筆」のうちインクを使うものを指している。

それに対して、中国語における新造語はより簡単である。「筆」を接尾辞として、前に説明的な語をつけ、大量の派生語を作り出した。例えば、铅笔（鉛筆）、圆珠笔（ボールペン）、中性笔（中性ペン）、自动铅笔（シャープペンシル）があるが。同様に、中国語にも、英語の「pen」に相当する「硬筆」という言い方がある。

以上の分類を整理すると

図4



現代発明された実用的な筆記用具の中、シャープペンシルは1915年日本で生まれた。最初は「早川式繰出鉛筆」と命名されたが、後に輸出のため商品名を「エバー・レディ・シャープ・ペンシル」に変わった。現在、単に「シャープペンシル」と呼ばれており[22]、シャープペンシルは中国にも輸出されたが、中国から「筆」の伝来の時と違い、シャープペンシルそのものは中国でも普及したが、名称が受け入れられなかった。中国では独自な名称「自動鉛筆」が作り出され、定着になったのである。

このような意訳から作り出された中国語語彙の例として、日本語ではタブレット端末などに使うものを「タッチペン」と訳されたのに対し、中国語では「触控笔」また「触摸笔」と訳された。「触れてコントロールする筆」という意味である。

以下、主要な筆記用具が発明された時期について、要約しておきたい。

筆：紀元前220年頃発明、600年以前日本に伝来した。

鉛筆：1616年発明、1675年量産、日本17世紀徳川家康が使用したと言われる[23]。

万年筆：イギリスで1809年特許権が取り、1884年横浜のバンダイン商

会が輸入し、日本橋の丸善などで販売された。当時「針先泉筆」と呼ばれており、直後、国産万年筆を模作した大野徳三郎から「万年筆」と呼ばれるようになった[24]。

シャープペンシル：早川金属工業（現在のシャープ）の創業者である早川徳次は、本業の傍ら金属製繰出鉛筆を発明、「早川式繰出鉛筆」として特許を取得した。

ボールペン：ユダヤ系ハンガリー人のジャーナリストのビーロー・ラースロー（László Bíró）が世界初の近代的ボールペンを考案し、1938年にイギリスで特許を取得した[25]。1950年代から本格に量産されるようになった。

主要な筆記用具の発明された時期と日本へ伝来した時期を見ると、最古の「羽根ペン」と1972年開発された「筆ペン」以外、1915年で発明されたシャープペンシルを境に、以前の筆記用具は漢字語彙で表記され、以後のものはカタカナで表記されるようになった。筆記用具の日本語命名方法がカタカナで音訳化にされる傾向がみられるが、他方、中国語の命名方法はほぼ一貫しており、筆記用具の特徴を表す言葉の後ろに「笔」を付け加えるという方法である。

日本語に漢字で表記されている語彙は「万年筆」以外、「毛筆」、「硬筆」、「鉛筆」、「筆筒」、「筆箱」など、漢字で構成された語彙は全部中国語と共通している。さらに、ローラーボールの中には、インクが中性か、水性かにより詳しく分けて、中性ボールペンと水性ボールペンという日本語の名称もある。これに対して、中国では「ボールペン」の代わりに「中性」「水性」の後「筆」を付け加え、中国語として使用されている。

以上の説明からわかるように、両言語に共通している語彙は二つの特徴がある。

一つ、漢字、また一部が漢字で構成された語彙であること。

二つ、「中性」、「水性」以外、昔からの語彙であること。

４．日中両国の「筆」に関する諺と熟語

諺、熟語は各国の文化において最も民族の英知を込めた表現である。長い歴史の流れから得た知恵で形成したものが多いため、文化と歴史を知るとき、また異文化を比較する際には良いアプローチである。特に日中両国は長い付き合いがあり、両国において古代中国の古典から諺と熟語を吸収したものが多くある。ただし、「筆」という漢字と道具が両国においても、長い歴史を持っているので、独自な諺と熟語も生じた。

筆者は「筆」を含む日本の諺と四字熟語を21個、中国の四字熟語（成語）を約70個収集した。数量上からみると、中国語の方が圧倒的に多かったが、この中、稀にしか使われない諺もある。両言語の諺を比較する際、四つの種類に分類することを試みた。一つの種類に代表的な諺を数個取り上げて分析していくことにする。

一、ある国の独自な諺で、相手国において相当する表現がないもの。

日本語：「弘法筆を選ばず」

日本の「筆」に関する諺といえば、大体真っ先にこの諺が浮かんでくるであろう。能書家の弘法大師はどんな筆であっても立派に書くことから、下手な者が道具や材料のせいにするのを戒めた言葉である。しかし、中国の諺の中には、同じ表現がなく、意訳しかできない。筆者は初めてこの諺を読んだとき素晴らしい諺だと思っていたが、深く考えると、間違っていると思うようになった。達人は必ず自分が使う道具に好みがあるであろう。仮に、弘法が普通の筆を使っても、普通の人が卓越した筆を使うより良い字が書けるとしても、傑作という芸術の頂点を望むなら、より精巧な筆が必要なのではないだろうか。しかも、中国の諺の中には、「弘法筆を選ばず」と正反面の諺がある。「職人が立派な仕事をしたいと思ったらまず道具を研ぐ」（工欲善其事，必先利其器[26]。）　この諺から、日中両国文化の差異が少し見られるであろう。

中国語：「妙筆生花」（「筆頭生花」、「夢筆生花」、「生花妙筆」）

四つの熟語は同じ意味で、現在よく使われているのは「妙筆生花」

である。字面から解読すると、「巧妙な筆で花を咲かせる」という趣旨で、立派な文章また文章力を称賛する場合使う熟語である。唐末、五代初頭の文人王仁裕の『開元天寶遺事・夢筆頭生花』から「李白が若い頃、筆の上花が咲いたという夢を見て、後に素晴らしい詩人になった。」という物語があった。「夢筆生花」また「筆頭生花」のほうが出典の表現と近いが、後の文人に引用されるうちに、「妙筆生花」になった。

二、 ある国の独自な諺だが、相手国においては別の諺で対応できるもの。

日本語：「弘法も筆の誤り」 中国語：「智者千慮，必有一失。」（知者も千慮に一失あり）

日本の諺の字面からみると、弘法大師のような筆の達人でも、時には書き損なうことがあるということだが、人間であれば、ミスを犯すことは避けられないという理は多くの国の諺にもある。「智者千慮，必有一失。」の出典は『史記・淮陰侯列傳』から、日本語でも同じ表現がある。

三、 由来、出典は同じだが、漢字または語順が変わったり、意味が変化したりしたもの。

日本語：「燕頷投筆」 中国語：「棄筆從戎」（投筆從戎）『後漢書・班超傳』

後漢の班超は、筆書の仕事をしていたが、武功を上げたいと思い、筆書の仕事を止めて武将になったという故事から。「投筆」＝「棄筆」＝筆を捨てること。「從戎」は兵器を取ること。「燕頷」は燕のような顎という意味で、強く勇ましい人の人相。中国語「燕頷」は同じ意味。

日本語：「椽大之筆」 中国語：「大筆如椽」『晋書・王珣傳』

立派で堂々としている文章のたとえ。

「椽」は屋根を支える最も立派で太い木材。垂木。

西晋の時代の王珣は、垂木のような大きな筆を授けられる夢を見て、そのように筆をふるう機会があるのではと思っていると、武帝が崩御して、忌辞などで堂々とした文章を書いたという故事から。

日本語：「落筆点蠅」　中国語：「落筆成蠅」『三国志』「呉志・趙達伝・注」

「点蠅」は蠅（はえ）の絵を描くことで、筆を落とした際の汚れをうまく蠅の絵にするという意味。

三国時代、呉の曹不興が孫権の命で絵を描いていたときに、誤って筆を落とした際の汚れを蠅に書き換えてうまく処理した故事から。

四、 由来、出典が同じ、形と意味があまり変わらないもの。

「一筆勾消」（一筆勾銷）『五朝名臣言行録』

今までのものを全て取り消すこと。中国の北宋の時代に范中淹は、才能のない駄目な役人を名簿から消していったという故事から。

「口誅筆伐」

言葉と文章で激しく批判、攻撃すること。

「春秋筆法」

間接的な表現を使って真意を説くこと。

孔子の著『春秋』の表現は簡潔で、直接に人物と出来事に対する意見を述べることがなく、細かいところの描写と修辞の方法で間接的に筆者の意見を表すという文章の書き方から。

「董狐之筆」『春秋左氏伝』

圧力に負けずに、事実を曲げずに正しく歴史を書き記すこと。

「董狐」は晋の歴史記録官をしていた人の名前。

国王の霊公が殺害されたときに、宰相の趙盾の所業だと記載したが、実際には弟の趙穿が殺害したために趙盾は訂正を求めたが、弟を見逃した罪の重さを訴えて変えることがなかったという故事から。

５．終わりに

結論として、両言語における「筆」とその派生語の比較から分かるように、一）中国語は意味を持ち、説明的、物事の特徴を描く漢字語彙（鉛筆、硬筆など）を日本語から積極的に借用した。二）日本語において外国語から音訳してできた語彙（例えば、ボールペン）に対しては、中国語は

意訳「圆珠笔」（丸い玉の筆）という対応を取った。三）日本で作り出された語彙（シャープペンシル）に対し、中国語は音訳、意訳のどちらでもない、独自に「自動鉛筆」という語彙を作り出した。いずれにしても、中国語は語彙の意味に重視し、物事の特徴を表現する語彙が中国語に受け入れられやすいという傾向が見られる。例えば、19世紀末、日本では欧米の「Fountain pen」という筆記用具を模倣し国産化した後、それを英語の「Fountain pen」という意味を踏まえて、「万年筆」という名前をつけた。その後、万年筆が中国にも普及して、「万年筆」という漢字で構成された言葉が一部の中国人に借用されたこともあったが、定着することができなかった。日本に留学した経験がある魯迅も自分の文章で「万年筆」という言葉を借用したことがあるが[27]、定着に至らなかった。現在常用の『新華字典』に「万年筆」が収録されていない。意訳の「自来水筆」（インクが自動的に来る）、また独自に作り出した「鋼筆」という中国語の名称が「万年筆」より直接的に筆先が鋼で作れるなどの特徴を表し、想像がつきやすいので、「望文生義」（字面から意味をこじつける）の傾向に強い中国人に受け入れられたのであろう。一方、日本語においては西洋から受けた影響がより強いことが見られ、「筆」とその派生語がより複雑な状況になった。例えば、「筆」は単独に使われる場合と一部の筆記用具の名称（筆ペン）においては、本来の意味（毛筆という意味）を保存しているが、他の大部分の「筆」で構成された漢字語彙（例えば、鉛筆、筆箱など）などは、筆記用具の一種の意味、あるいは全部の筆記用具のことを指すという意味まで拡張し、それらの区別が曖昧な部分もある。さらに、20世紀初頭から、筆記用具の名称がカタカナ語で命名されたり、訳されたりすることが増えるようになり、「筆」という漢字を使った、新しい筆記用具の命名をやめる傾向になった。

日中両国の筆記用具の命名の差異から、近代以後、両国の西洋からの外来語についての対応が別々の道を歩んできたことが明らかになった。明治時代において、西洋の新しい物事に対して作り出された和製漢語は大量に中国語に借用され、現代中国語の語彙になったこともあったが、両言語の構造的な差のため、カタカナ語の筆記用具名称は中国に借用されて中国語の語彙に取り入れられることはなかった。

諺は文化の一つとして民族の知恵の結晶である。諺は僅かの字しかないので、深い説明ができなく、全部の場面で正しいとも言えない。それ故、日中両国の言語において正反対の諺や他言語において存在しない諺がある。日中両国の「筆」を含む諺と熟語を比較してみると、国の独自の価値観と文化が見られる。例えば、「弘法筆を選ばず」という諺から、日本人の「口実はしない」という性格が見られる。独自な諺の他、同じ故事から別々の表現になったもの、同じ故事から長い時間に渡っても、同じ表現で表す諺もある。両言語における諺の表現の差異に目を配り、日中両国は、これからの相互理解の一環として親密な関係を結んでほしいと考えている。

「筆」は日中両国に共通な文化と書道という芸術を作り出し、そして、先祖から伝来したものから、独自の語彙や諺と文化も生み出した。今後、両国は今でも共通しているものを大切な絆にしつつ、異文化交流の視点においてお互いの差異を理解し、東アジアの特色のある文化を再興するために、力を合わせることを切に願ってやまない。

注

---

1 本論文は作成中の博士号申請論文の一部として構想されたものである。

2 孫文（そんぶん）（1866年11月12日～1925年3月12日）は、中国の政治家、革命家。初代中華民国臨時大総統。中国国民党総理。辛亥革命を起こし、中華民国、中華人民共和国とも国父（国家の父）と呼ばれる。海峡両岸で尊敬される数少ない人物である。

3 蒙恬（もうてん）（？～紀元前210年）は中国の秦の将軍。楚討伐、斎討伐、匈奴討伐、万里長城の建設などの功績があるが、趙高たちの陰謀によって扶蘇と共に自殺させられた。

4 簡牘（かんどく）とは、古代中国において墨で文字を書くために使われた、短冊状の細長い板である。木で作られたものを木簡と言い、竹で作られた竹簡と合わせて、総称簡牘。

5 中国宋代初期頃（977年～983年、太平興国2～8年）に成立した類書である。類書とは中国や日本古来の参考図書のこと、百科事典のようなものである。『太平御覧』の引用書の大半が散逸したので、現在資料的価値が高い。

6 西晋の重臣張華（232年～300年）が編修した。原書は散逸した。

7 許慎（きょしん）(約57年～約147年)は、後漢時代の儒学者、文字学者、最古の部首別漢字字典『説文解字』の作者として知られる。

8 説文解字（せつもんかいじ）は、最古の部首別漢字字典。永元12年（西暦100年）に成立した。

9 原文は「聿：所以書也。楚謂之聿，吳謂之不律，燕謂之弗。」

10 仰韶文化は中国の黄河中流全域に存在した新石器時代の文化である。年代は紀元前5000年から紀元前3000年あたりで、日本の縄文時代の後期と相当する。

11 严 文明『仰韶文化研究(增订本)』文物出版社　2009

12 董 作賓（1895年～1963年）は、中華民国の甲骨学者、甲骨文字の研究の開拓者である。

13 董 作賓「甲骨文〔斷代研究〕例」『慶祝蔡元培先生六十五歲論文集』1933

14 河南省文物研究所编『信陽楚墓』文物出版社　1986

15 吾丘 衍（1272年～1311年）中国元代初期の著述家、文人である。中国最初の篆刻理論書『学古編』を著して篆刻芸術の指針と示した。

16『大平御覧』文部二十一　崔豹《古今注》曰：牛亨問曰：「古有書契已來便應有筆也，世稱蒙恬造筆，何也？」答曰:「自蒙恬始作秦筆耳。以柘木為管，以鹿毛為柱，羊毛為皮，所謂鹿毫竹管也，非謂古筆也。」

17 隷変とは、始皇帝から統一文字になった篆書体の書き方は複雑で、公文書を書くとき、効率向上のため、簡略した隷書体が使われ、前漢前期には篆書体から隷書体への移行が進み、こういう隷書体へ変化した過程が隷変と呼ばれる。

18 金文とは、青銅器の表面に鋳込まれた、あるいは刻まれた文字のこと（「金」はこの場合青銅の意味）。中国の殷・周のものが有名。年代的には甲骨文字の後にあたる。

19 熊野町郷土史研究会／編　『芸州筆の歴史』　熊野町郷土史研究会　1995　p11

20 北斉（550年～577年）は、中国の南北朝時代に高氏によって建てられた国。国号は単に斉であるが、春秋戦国時代の斉や南朝の斉などと区別するために北斉・高斉と呼ぶ。

21『隽修罗之碑』民国拓本は中国北京圖書館に保蔵されている。

22 シャープ株式会社　『シャープ100年史「誠意と創意」の系譜』

23 ヘンリー・ペトロフスキー、渡辺潤・岡田朋之訳『鉛筆と人間』　晶文社、1993年

24 富田仁　『舶来事物起原事典』　名著普及会、1987年

25 Collingridge, M. R. et al. (2007) “Ink Reservoir Writing Instruments 1905–20” Transactions of the Newcomen Society 77(1): pp. 69–100

26『論語・衛靈公』：子貢問為仁。子曰：「工欲善其事，必先利其器。居是邦也，事其大夫之賢者，友其士之仁者。」

27 魯迅　『且介亭杂文·论毛笔之类』「青年里面，当然也不免有洋服上挂一支万年笔，做做装饰的人，但这究竟是少数，使用者的多，当然还在于便当。」（日本語訳：青年たちの中、万年筆を飾りとして洋服に付けている人もいるが、その数は少ない。しかし、使う人が多い理由は、やはり便利なのだろう。）

参考文献

日本語文献

金丸邦三編著、恵萩生協力『日中ことわざ辞典』同学社、2000
木村卜堂　『日本と中国の書史』　日本書作家協会、1971
鈴木修次　『日本漢語と中国―漢字文化圏の近代化』　中央公論社、1981
沈国威　『近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』　笠間書院、2008
陳力衛　『和製漢語の形成とその展開』　汲古書院、2001
飛田良文　『明治生まれの日本語』　淡交社、2002
中西慶爾編　『中国書道辞典』　木耳社、1981
森岡健二　『日本語と漢字』　明治書院、2004
藤堂明保　『漢字とその文化圏』　光生館、1971

中国語文献

高明凱、劉正琰　『現代漢語外来語研究』　文字改革出版社、1958
刘正琰、高明凱等　『汉语外来词词典』　上海辞书出版社、1984
史有为　『外来词:异文化的使者』　上海辞书出版社、2004
張玉法　『先秦的傳播活動及其影響』　台灣商務印書館、1993
左民安，陆宗达，李学勤　『细说汉字：1000个汉子的起源与演变』　九州出版社、2005